



Osanaga

熊本藩御用絵師を務めた
先祖の下絵を活かして、
古き良き作品を蘇らせる。

日本画家・狩野 師華

Motoka

日

本の絵画史上、最大の絵師集団と呼ばれる狩野派。1434（永享6）年に生まれ、室町幕府の御用絵師として活躍した正信がその祖とされる。その子、元信は漢画と大和絵を融合させた画風を確立。狩野派繁栄の基礎を築いた。元信の孫に当たるのが、永徳。狩野派の長として織田信長、豊臣秀吉という天下人に仕え、安土城や大坂城などの障壁画を制作している。徳川幕府誕生後は、永徳の長男光信と彼の長男定信の家系が中橋狩野家を、永徳の次男孝信とその長男探幽の子孫が鍛冶橋狩野家、木挽町狩野家、浜町狩野家を代々世襲。

この四家は「奥絵師四家」と呼ばれ、幕府の御用絵師として絶大な権勢を誇った。

江戸時代には幕府だけでなく、全国の諸藩でも狩野派の絵師たちを御用絵師として抱えていた。肥後国（現在の熊本県）では、肥後狩野家と呼ばれる絵師の存在が知られている。肥後熊本藩二代藩主細川光尚の勧めで、絵師として肥後に入った狩野（窪田）成信がその祖。もともと一族は丹波出身の由緒正しい武士の出で、系図には明智光秀や細川忠興など錚々たる名が並ぶ。光尚が江戸で没したため、成信は御用絵師に取り立てられなかったが、藩の指示を受けて絵を

描いていたようだ。成信の孫である三代師信以降の肥後狩野家は、藩から木挽町狩野家への入門を命じられ、江戸で学んだことがわかっている。師信は藩主の信頼も厚く、御用絵師となった。

また、八代養長は、江戸城本丸御殿、西の丸御殿の障壁画を描いた木挽町狩野家九代の養信（狩野芳崖や橋本雅邦の師）の高弟として、これら障壁画制作の次席を仰せつかってもいる。

しかし、時代は変わりつつあった。明治維新

とその後の廃藩置県によって藩からの禄が無くなる。九代養行は絵で食って行くことができず、和歌の師に転身。その子、勇雄は能楽の道に進んだ。

一時途絶えていた絵師としての肥後狩野家を再興したのが、勇雄の子である瑠鵬（本名・丹秀）の妻としてこの家に嫁いできた師華である。彼女は養長ら先祖が残してくれた何百枚もの貴重な下絵を修復し、美しい日本画を描いてきたのだ。



武内宿禰
115.2 x 46.9 cm
岩絵具、和紙
2005